

中国語の近代語彙の形成*

F. マシニ

第一章 中国の言語と歴史：1840年～1898年

1.1 19世紀初頭における中国の言語状況

1644年より中国を支配した清王朝は、歴代王朝の行政体系を維持する一方、朝廷内では満州語、モンゴル語、中国語という3つの言語を併用することを強制していた。しかし、時代が下るにしたがって、朝廷の多言語政策は次第に力を失い、19世紀の初めに、中国語は再び以前の地位を取り戻し、最も広く受け入れられる言語となった。そうして、中国語は正式な言語として一般に使用され、満州語とモンゴル語は宮廷内および旗人の間でのみ用いられるようになった。都では、中国語は官吏が標準的に用いる言語であり、文書は、その内容が満州族とモンゴル族に関係するときだけ、満州語とモンゴル語に翻訳された。

清王朝では、官吏の選抜にあたり、伝統に則った厳しい試験制度が設けられていた。科挙試験は郷試、会試、殿試という3つの段階に分けられ、その試験内容はすべて、文学と哲学の典籍である『四書』『五経』、および哲学者朱熹の『四書集注』に依拠していた。

受験生は、必ず形式と文体の両方において、厳格な規定に従って文章を作成しなければならなかった。よく知られている“八股文”は、必ず起股、中股、後股、束股によって構成され、すべての股は排比・対偶の文を用いなければならなかった¹。言語学の立場からみればこの文体は形式的なもので、先哲の言葉に基礎を置いていた。官吏たちは、この文体をもっと形式張った形で、すべての公式文書に用いた（後に“文言”として知られる）。

科挙試験は文学の問題のみ出題されることになっていたのだが、実際には言語に関する試験であった。受験生は伝統文化に精通していることを示さなければならず、同時に、何世紀もの間、中国文化を伝えてきた言葉を自在に操ることができる能力も示さなければならなかった。中国のように広大な面積を有する国では、口語としての方言がたくさんあるので、当

¹ 八股文の形式は、明の成化年間(1465-1487)政府によって確立された。Zi, *Pratiques des Examens Littéraires en Chine*: 7, Imprimerie de la Mission Catholique, Shanghai 1894. を参照。科挙試験に関する概説は、宮崎市定『科挙：中国の試験地獄』中央公論社 1963 を参照。

然のことながら、すべての行政区域で通用する書面語が必要とされる。

問題はこの文官試験の制度が受験生の書面語知識だけをテストすることである。受験生に要求された口語に関する知識は、所定の典籍の中に含まれている韻律の問題を熟知しているかどうか限定されていた。これらの典籍は漢字による特殊な表音法（反切）を使用しているからである。しかし、これは古代音韻体系に関する深い知識を必要とせず、ただ単に同韻をもつ字を知っていればよい。そして同韻とされる漢字の多くは、受験生が話す独自の方言の発音と一致しない。

口語よりも書面語の技能を重視する受験生は、行政面でいろいろな問題を引き起こした。特に都の法廷において問題が深刻であり、多くの中央官僚は、ある種の標準的な口語の必要性を強く感じていた。

数世紀に渡って、官吏らが用いる話し言葉が次第に形作られてきた。これが後に言う“官話”である。これは一種の共通語であったが¹⁾、朝廷で使用された正式な書面語の特徴が一部残されていた。15世紀以来、北京はずっと中国の行政の中心であり、北京で話され、形成された“官話”はおのずから、北京方言の強い影響を受けていたのである。

標準的な口語に対する要求は、各省においてもっと強かった。官吏達たちは執務した際、しばしば通訳を雇い、方言を官話、または官吏自身の郷土の言葉に訳させざるを得なかった。

このように19世紀（恐らくその前も）に、中国の言語状況は非常に多様化した様相を呈していた。政府の官吏は（程度の違いこそあれ）標準的な“文言”、そして、1つあるいは複数の口語方言に精通していた。北京に住む官吏は通常の会話には、官話を用い、極めて稀な状況においてのみ満州語、モンゴル語あるいは自分の方言を用いた。地方へ出かけるとき官吏は官話の他に、主に自分の方言を話すのだが、公務など現地の人たちに接触を試みる時は、また別の方言を用いるかもしれない。

文言と官話は2つの異なる言語である。1つは書くためのもので、もう1つは話すためのものであり、それぞれの使用場面は、峻別されている。文言と官話は、主に国家行政の目的に使用され、他の多くの方言と並存していた。これらの方言は、人為的に作られたものではなく、それぞれの地域の言語習慣を基礎とした言語形式である。このような方言区域は、地理的にあるいは民族的に区画されたものである。

現在の中国方言の研究によれば、中国は7つの方言区域、すなわち呉、贛、湘、粵、客家、閩、及び北方方言区に分けられている²⁾。これらの方言は均等に分布しているのではなく、北方方言を話す地域は中国全体の4分の3を占め、残りの6つの方言がその他の地域を占める（少数民族の居住地は含まない）。北方方言区は、他の方言区より分断の少ない1つの方

²⁾ 『漢語方言概要』p.22、袁家驊、文字改革出版社1989。なお、現在、この最後のグループを指すのに用いられる用語は“官話方言”である。この“官話方言”と初期の“官話”の間に、歴史的に近い関係が認められるが、混乱を避けるため、他の名称を用いたほうが望ましいであろう。

言区をなしているため、北方方言は比較的均質なものとなっていた。また中国の長い歴史の中で、北方地域は一貫して全国の政治・行政の中心であったことも、官吏の用いる官話、又は共通語が、主に北方方言を基にしている要因となっていた。

唐宋から、特に明清の時代に、文学作品に用いられたもう 1 つの書面語（後に“白話”と呼ばれる）も発展を成し遂げた。この言葉は説話文学の作品に用いられ、これらの作品は後に中国で、広く知れ渡った。作品の中から当時の中国で用いられていた口語——すなわち北方方言と白話の痕跡を見付けることができる。実際には、“白話”は、もともとある方言群の中で文化的、経済的な理由により代表的と考えられる言葉を指すのに用いられた語で、言語の 1 つの特殊な類型を意味するものではない。たとえば、粵方言区では、“白話”（広州方言では bagwa）と言えは通常、標準語であった広州語のことを指す³。吳方言区では“白話”（吳方言では ba²ho¹³）は動詞で、リラックスした状況での“会話”、“おしゃべり”、“世間話”という意味であるので、“白話”をするにはその人の方言を用いることになる⁴。

“白話”という語をもって北中国で使用されている特定の文学言語を指すようになったのは、20 世紀初頭のことであった。まもなくして、この名称はある方言群の中で代表的と考えられる話し言葉、とりわけある種の特殊な（北方）白話を指すようになった。本書では、“白話”という語は常に北方の民間文学の言葉を指す。但し、次の点を強調しておくことが重要であろう。つまり、19 世紀末までは“白話”という語は通常、正統的な文学の言葉より理解しやすいある種の話し言葉を指していたのである⁵。

文言、官話、白話は、人々が話す方言との間には明らかな相異が存在している。方言に密接な関係を有する白話でも、それを一般に用いられる言葉と見なすことはできない。というのは、白話が示しているのは、各方言間に存在する差異を解消するための 1 つの連続した発展段階に過ぎないからである。

清王朝はそれまでの王朝と同じく、中国社会の言語事情の複雑性が明らかであるにもかかわらず、言語問題にほとんど注意を払わなかった。ただし、伝統的な科挙制度のお陰で、標準的な書面語に精通した官僚たちは今までのように問題なく広大な国土を統治し続けることができたのである。

雍正帝は恐らく、言語問題を取り上げた唯一の清朝皇帝だったであろう。彼は、中国南部地方の福建・広東出身の官吏に官話を学習するよう命じた。実際、これらの地方の方言は官話と全く異なるものであるため、官吏たちが官話を理解することは非常に困難であった。1728

³ 『廣州話方言詞典』p.5、饒秉才ほか、商務印書館 1981。

⁴ 『簡明吳方言詞典』p.60、閔家驥ほか、上海辞書出版社 1986。

⁵ “白話”という用語の誤解を避けるために、無錫方言を用いなかった《無錫白話報》は、1898 年第 5・6 合巻号から、名称を《中国官音白話報》に変えた。§ 1.7 参照。これとは反対に、1902 年上海で創刊された《蘇州白話報》は、完全に（その地方で使われていた）吳方言を用いて書かれた。阿英『晚清文藝報刊述略』p.83、古典文学出版社 1958 を参照。

年雍正帝は、勅旨を下し、福建、広東両省の督撫に、正しい発音、つまりそれらの省で教えられている官話の使用を保証するために評価制度を導入するよう命じた。皇帝の勅旨の下、福建の各地で“正音書院”が設置された。高級試験を合格するために、福建省の受験生は官話に関して十分な知識を持たなければならなかった。1737年、この制度は完全に廃止されたが、地方政府は自分の影響力で熱心に受験生と官吏の間で官話を普及する努力を続けた⁶。

一方 19 世紀初頭まで、広東の状況はほとんど変化が見られなかった。1840年、その状況については、中国語の通訳をしていたイギリス人青年羅伯聃 (Robert Thom) は、次のように述べている。

「康熙帝がああ^{マア}の勅旨を發布して以来、すでに 1 世紀あまり経ってしまった。しかし我々はこれまでに何 1 つ変化を感じる事ができない」⁷。

19 世紀、多くの西洋人が中国南部への渡航が許された時点に、中国の言語事情は、依然として混乱を続けていた。しかし、一連の武力事件が 19 世紀前半の中国の政治と経済のシステムを変えた。それは言語にも影響を与え、伝統的な状況は次第に変わり始めた。

* 本編は、イタリアローマ大学教授 Federico Masini 氏著 *The Formation of Modern Chinese Lexicon and Its Evolution Toward a National Language: The Period from 1840 to 1898* の第 1 章 §1.1, 1.2 の全訳である。原書は、カリフォルニア大学『中国言語学報』の 1 冊として 1993 年に出版された。書名からも分かるように、本書は中国語が前近代的なものから近代的なものへ進化していく過程を語彙の側面から解明しようとするものである。本書は、1996 年に香港語文学会により中国語に翻訳された。この度、マシニ教授の了解を得て、日本語に訳し、『或問』に連載することにした。翻訳は、森元亮介、谷口知子、浜元景子、後藤裕也が初稿を分担し、沈国威が校正と表現の統一に当たった。

なお、雑誌連載の形を取っているので、原書巻末の参考文献は、脚注に示しておくことにした。

訳注：

⁽¹⁾ 原書に *lingua franca or koinè* とある。

⁶ 俞正燮『癸巳存稿』巻 9、270 頁参照。雍正帝の勅旨が出された後、およそ 18 世紀末から 19 世紀初めにかけて、福建、広東の人々は官話あるいは正音を学習するための様々なハンドブックを出版した。Paderni Paola, “The Problem of Kuan-hua in Eighteenth Century China: the Yung-cheng Decree for Fukien and Kwangtung”, in *Annali, Istituto Orientale di Napoli*, 1988: 262-263 参照。

⁷ Thom Robert, 羅伯聃『意拾論言』Printed at the Canton Press Office 1840: viii.

1.2 西洋との接触における言語問題

過去の数世紀にわたる西洋と中国との接触は、中国の言語面に与える影響は、微々たるものであった。実際、19世紀以前、一部の西洋人はすでに中国語に対して興味を示していたにもかかわらず、中国では正式に西洋の言語を学習する者はほとんどいなかった¹。

中国と西洋の最初の言語の接触は、宣教師と商人を通じて行われた。外国君主が直接派遣した外交使節以外では、宣教師と商人が唯一中国を訪れた西洋人であった。

17世紀、中国語に関する体系的な研究は、中国で布教活動に従事していたイエズス会士らによって始められた。中国語で書かれたいくつかの書物(マテオ・リッチとギュリオ・アレニのテキストも含む)は朝廷の蔵書楼に収められていた。これらの書物は中国で数世紀にわたって、西洋事物に関する知識の主要な情報源になっていた²。科学、地理、教育の分野では西洋の知識に基づいて造られた最初の新語は、イエズス会士が中国語で書いた初期の著作の中で見出すことができる³。

マテオ・リッチは、彼の前任者たちが1552~1583年の間中国で行った布教活動の失敗原因の1つは中国語に関する知識の不足にあると指摘している⁴。彼は、中国語の知識は布教活動の上で不可欠なことだと考えており、中国に着いたばかりの宣教師について次のように述べている。「.....中国に着いたばかりの新任宣教師は、任務を遂行するためには、まず中国語を学習しなければならない.....」⁵

イエズス会の宣教師は、まず南京、続いて北京での居住も許可された。これはいうまでもなく、中国語を学習する上で有利な条件となった。この2つの都市は中国の政治の中心であ

¹ 19世紀後半以前に、ロシア語は中国で正式に教授された唯一の西洋言語であった。1757年、ロシア語学校「俄羅斯文館」が、北京に設立された。この学校は、対口交渉の実務に従事する中国人の通訳者を養成する機関である。Biggerstaff Knight, "The T'ung Wen Kuan", in *Chinese Social and Political Science Review*, XVIII, 3, 1934, 307-340. 参照。

² マテオ・リッチと、アレニに関する状況、及び中国への西洋の学問の導入におけるカトリック教宣教師の貢献については、とりわけ Bernard Henri S.J., *Les adaptations chinoises d'ouvrages européens, bibliographie chronologique depuis la venue des Portugais à Canton jusqu'à la Mission française de Pékin, 1514-1688*, in *Monumenta Serica*, X 1945, 1-57 and 309-388. Europe. Latourette Kenneth Scott, *A History of Christian Missions in China*, Society for Promoting Christian Knowledge, London 1929. 徐宗澤の『明清間耶穌會士譯著提要』中華書局1949などを参照。イエズス会宣教師の1580~1680年の間での在華布教活動に関する欧文書目に、Zürcher Erik, Standaert Nicolas S.J., Dudink Adrianus, *Bibliography of the Jesuit Mission in China, ca. 1580- ca. 1680*, Leiden University, Centre of Non-Western Studies, Leiden 1991.がある。

³ 例えば、「幾何」「経線」「緯線」「熱帯」「冷帯」「温帯」「地球」「重学」等の単語である。リッチ、及びその後のアレニは、さらに中国語の在来語に新しい意味を与えた(借意)。これらの語は主に天文学に用いられている。例えば、「北極」「南極」「赤道」等である。イエズス会の宣教師によって創られたその他の術語には、「大学」「文科」「理科」「医科」「医学」「中学」等がある。§2.2.2, §2.2.3 参照。

⁴ D'Elia Pasquale S.J. (ed.), *Fonti Ricciane*, Libreria di Stato, Roma 1942, 3 vols: no. 203, note 1 を参照。

⁵ D'Elia の前掲書: no. 752. 参照。

り、官話が広く使用されていただけでなく、現地の方言も北方方言の系統に属していた。イエズス会の宣教師は南京と北京で、教養のある、流暢に官話を話す中国の役人と交流を持つようになった。官吏たちの口語（官話を指す）と現地の方言との違いは、他のどの方言区のそれよりも小さい。ここから、マテオ・リッチは中国の言語事情に対する明確な印象を受け、官話の研究を始めた。彼は次のように述べている。「中国語のすべての変種の中に、官話と呼ばれるものがある。これは、審問や法廷で使用できる法律の言語である。官話は、それを話す多くの省で容易に習得することができるし、子供や女性でも熟知しているの、他の地方からの人々と交流することもできる」⁶。

中国人信者にとって、ラテン語やまたはその他の西洋言語の知識が必要かどうかに関しては、中国で布教活動に従事していた宣教師の間でも意見が分かれていた。一部の宣教師は、教養の高い知識階級の信者でも、神学とラテン語に関する高度な知識がないという事実が、彼らを聖職者に任命することの妨げになっていたと考えていた⁷。

ラテン語とイタリア語について完璧な教育を受けた最初の中国人は、恐らくマカオ出身の青年、鄭馬諾であろう⁽¹⁾。教名を Emmanuel de Siqueira (1633-1673) といった。1650年、鄭馬諾は17歳の時にローマに渡って、ローマ神学院に学び、1660年に卒業した。ローマでの学業を修了した後、彼はポローニャ、リスボンを旅行して、中国に戻り、布教活動に従事した⁸。

多くの宣教師がネイティブ神職者の任用に前向きな態度を取っていたので、中国人信者に対してラテン語、またはその他の西洋言語を教授する決定がなされた。中国人神職者の必要性は原則的に誰もが認めたところだが、大多数のイエズス会の宣教師は、ヨーロッパでの学習が、キリスト教教義を完全に会得する唯一の道であると信じていた。一方、ドミニコ会とフランシスコ会の宣教師たちは、中国に神学院を建設し、中国人神職者の養成にもっと積極

⁶ D'Elia の前掲書: no.53 を参照。

⁷ マテオリッチの著述から、彼はかつて、信者の徐光啓に大まかなラテン語の知識を教えたことが分かる。但しリッチは、ラテン語教育を布教活動の基本的な部分とは考えていなかったようだ (D'Elia の前掲書 II, 254)。1625~1626年、ニコラス (金尼閣 1577-1628) は、自著『西儒耳目資』(ラテン語のアルファベットで中国語を表記する最初の試み) の協力者、官僚王徴にラテン語を教えていた。ルドビコ・プリオ (1606-1682) は、中国人神職者の任用に賛成し、杭州の近くに神学院を建設することを提案した。(Bertuccioli Giuliano, *Biografia di Ludovico Buglio*: 6 で引用されている、Archivum Romanum Societas Jesus, Jap-Sin. 199, f. 21 参照)

⁸ ローマのイエズス会の資料館に、鄭馬諾がイタリアで過ごした期間の記録があり、その中に、1651年10月17日付の彼の直筆の短いメモが含まれている。イエズス会の信者になるためにローマ Saint Andrea 教会に入った時に書いたものである。私見では、これは中国人が西洋言語で書いた最も古い文章の一つと思われる。(Archivum Romanum Societas Jesus, Rom., 173, f.92v) 鄭馬諾の関しては、Rouleau Francis A. S.J., *The First Chinese Priest of the Society of Jesus, Emmanuel De Siquwira. 1633-1673, Cheng Ma-no Wei-hsin, in Archivum Historicum Societatis Iesu, anno XXVIII, Ian-Iun. 1959, 3-50.*参照。

的だった⁹。

ヨーロッパにおける中国人司祭を専門的に養成する最初の機関はナポリに創立された“中国神学院”（*Collegio de' Cinesi*, 1732.7.25～27）である。創設者は、教区在住の聖職者、マテオ・リッパ（Matteo Ripa=馬国賢 1682-1746）である¹⁰。彼は、1711～1723年の12年間宣教師として中国で過ごし、1724年に帰国したとき、5人の中国人青年をナポリに連れてきた⁽²⁾。ナポリでは、そのうちの2人（Giovan Battista Ku, Giovanni Evangelista In）はすべての教育をラテン語で受けた¹¹。

マテオ・リッパは彼の著『中国神学院修道会創設の歴史』の中でこの2人の中国人司祭の語学レベルについては直接触れてはいないが、次のようなことを述べている（Ripa 前掲書 III, 42頁）。

この2人は、司祭に任命された後、帰国するまでに、1734年に伝道総会僧侶会議での試験に参加した。試験科目は、“哲学と神学—スコラ哲学、教理と道徳”であった¹²。「1時間半の試験の間、彼らの素晴らしい出来映えを称える賛辞と喝采の声が鳴り止まなかった。その場に居合わせた人々、特に私に、強烈な印象を与えたのだ。」¹³また、中国神学院で教育を受けた別の2名の中国人司祭が、ジョージ・マコーニーのもとで、清王朝に派遣されるイギリス使節団の通訳として採用された。これは、彼らのラテン語とイタリア語の知識によるものである¹⁴。

個々の修道会が、異なる布教方針を採ることは、至極当然のことであろう。イエズス会はもっぱら、士大夫の間で信徒を獲得しようとした。しかし、士大夫は厳しい文官試験のために勉強をしなければならないので、ラテン語を系統的に研究する時間がなかった。ドミニコ会とフランシスコ会は、下層階級の民衆を神に帰依させることに興味を持っていた。それは明らかに（士大夫らに）キリスト教教義を研究させ、布教のためのことばを習得させるより、

⁹ 1656年、Gregroy Lo（又は Lopez、中国名：羅文藻 1610～1691?）は、最初の中国人のドミニコ会士となった。彼は、1674年1月4日、南京の司教と教皇代理に任命された。彼は1691年2月27日にこの世を去るまで、南京の司教を務めた。Benno P. Biermann M.O.P., *Die Anfänge der neueren Dominikanermission in China*: Pubblicazioni di Indologia Taurinensia, Torino 1986. p.133, n 70; Latourette の前掲書: 122-124 参照

¹⁰ Ripa, *Collegio de' Cinesi*: I, 497.

¹¹ 中国におけるラテン語の導入について、方豪「拉丁文傳入中国」『方豪六十自定稿』収、台北学生書局 1969: 1-38 を参照。

¹² “di filosofia, e di Teologia, tanto Scolastica, quanto Dommatica, e Morale” Ripa 前掲書 III45-46.

¹³ リッパによれば、この2人はイタリア語よりもラテン語のほうが良く理解できたようだ。2人は1734年中国に帰るとき、リッパは、帰途ラテン語で会話を練習するようとのラテン語による書面指示を与えた。（Ripa 前掲書 III 73-80）

¹⁴ 1人は甘肅省涼州の人で、Jacobus Li（李自標、1760-1828）と言ひ、もう1人は直隸の人で、Paulus K'o（柯宗孝、1758-1825）と言ふ。（Elenchus Alumnorum quae spectant ad Collegium Sacrae Familiae Neapolis, T'ou-se-we, Chang-hai (Shanghai) 1917: no39, no. 42; Crammer Byng J.L. (ed.), *An Embassy to China*, Longmans, London 1962: 319-320 参照）

有効だと考えられていたのである。

しかしながら、キリスト教の西洋と中国との間で生じた文化・言語の積極的な接触は短い期間に終わってしまった。イエズス会とドミニコ会、フランシスコ会はついに見解の一致に至らなかったため、ローマ法王庁は、中国人信者の中国の伝統的儀式への参列に関する3つの違った教令を發布しなければならなかった。第一の教令(1645年)はドミニコ会に有利であり、第二の教令(1656年)はイエズス会に有利であった。しかし第三の教令(1669年)は“ケース・バイ・ケース”を原則に、現地の宣教師に解決策をゆだねたものである。論争が十数年間続いた後、宗教法庁の数回の関与の下で2つの宗教代表団は雍正元年(1723年)中国を訪問した。しかし、清王朝の最終回答は、宣教師の中国での活動を全面的に禁止するというものであった。それを受けて、カトリック宣教師たちの活動はマカオに限定された。北京天文台で働く宣教師に限って布教してはならないという条件で、居留を許可された¹⁵。

19世紀初頭までに、広東・福建両省は、すでに数世紀にわたって海の航路を利用し続けた。最初に広州に訪れた欧州使節はポルトガル人のトム・ピレスで、1520年に商人たちを引き連れて上陸した。植民地マカオは1557年にポルトガルによって築かれ、その後まもなく宣教師たちも後を追ってやってきた。18世紀の初め、広東の広州(1715年には、東インド会社が広州に事務所を設立した。)、及び中国南部の港、福建のアモイ、泉州、浙江の寧波では、貿易が非常に盛んであった。しかし1757年、雍正皇帝は、すべての外国人の居住と貿易を広州に制限した。この制限令は1840年に解除されるまで続いた。

カトリックの宣教師によって始められた西洋人と中国人との付き合いは、その後、中国の言語学上の中心部からすっかり離れてしまった地方で続くことになった。その上、中国人と中国の言語に対する(18世紀の)西洋商人の態度は、17世紀のカトリック宣教師のそれとは全く異なった。宣教師は、真の目的が布教ではあったが、自らの学識によって中国社会にうまく入り込んでいった。それに対して西洋商人は経済利益を目的に、貿易を通じて中国に入ってきた。中国人の目には、宣教師が外国から来たとはいえ、彼らは文化的教養のある官僚であると映っていた。しかし、ポルトガルやオランダそしてイギリス商人に対しては、単に物質的利益に駆り立てられただけの「野蛮人」(“夷”)と見なされた。宣教師はかつて数十年間に渡って中国内陸部での居留を許可され、その上中国人と親しく交流することも許されていた。一方、(18世紀の)商人は直ちにマカオや広州に追放された。マカオは岬の孤島であり、広州では、西洋人の住居や倉庫、会社本部が、城外の細長い地域に集中していた。この地域は中国兵の厳重な監視下にあった¹⁶。

¹⁵ 典礼論争及びキリスト教中国布教史に関しては、簾一山『清代通史』中華書局1986、Latouretteの前掲書を参照。

¹⁶ 中国商人は西洋商人に三階建ての建物を数棟貸し、外国人はそこで商売したり、居住したりすることが許された。代理商“factor”の住居であるという理由から(Webster: 444)、英

1723 年以後、清王朝は、外国人と中国人とが直接接触することを全面的に禁止しようとした。両者の関係は純粋に商業的なものに限られ、特別な中国人仲介人を通じてのみ維持された¹⁷。すべての商取引は、ピジンイングリッシュと呼ばれる一種の混種語で行われた¹⁸。

「ピジン」は、18 世紀の前半ポルトガル商人に使用されていた通商上の言葉を指すタームである。ピジンは、主にポルトガル語と中国語の単語から構成されていたが、ポルトガルとすでに商取引をしていた他の東南アジアの国、特にインドとマレーシアのことばからも慣用表現が取り入れられていた¹⁹。しかし中国とイギリスとの貿易量が増加するにつれて、新しいピジンが形成された。他の地域からの単語は残されたものの、ポルトガル語の単語は次第に英語の単語に取って替えられた²⁰。18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、オリジナルの

語ではこれらのビルが“factory”と呼ばれ、中国語では“行”と呼ばれる（広州語の発音は *hong*、「会社」の意味）。広州 *factory* の詳細に関しては、Hunter Williams C., *The 'Fan Kwae' at Canton before Treaty Days, 1825-1844*, Kegan Paul, Trench, & Co., London 1882: 20-25; Chinese Repository, Description of Canton, II no. 4, August 1833, 145; Fairbank John K., *Trade and Diplomacy on the China Coast. The Opening of the Treaty Ports, 1842-1854*, Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1953, 2vols: 13 参照。

¹⁷ 1720 年以後、外国と中国のあらゆる取引は、中国語で“公行”と呼ばれる特殊な商社を通じて行われた。外国人はそれを *cohong* と称した。このような会社は一般に 10 人ほどの中国商人によって組織され（人数はしばしば変動する）、彼らは順番に外国商船が広州に接岸してから出航するまでの全責任を負う（Fairbank 前掲書: 50-51）。西洋人が彼らを *horse godfathers* と呼んだ故である。その他に外国人との接触が許可された中国人は銀行職員（英語で彼らを *shroff*、——広東語は式老夫 *shilaofu* と訛った——と称した。彼らは金銀物品の価格折衝を行う）、及び買弁と彼らの通訳だけであった。

¹⁸ ピジンは、おそらく英語の *business* が中国人によって音訳されたものである。（Hunter 前掲書: 61）。しかし、最近中国の学者は、“洋涇浜英語”という用語で、ピジンを指している。ピジンは中国人と外国人の貿易取引が行われていた外国人居住区の境界を定めている、上海にある川：「洋涇浜」に由来すると言う学者もいる（周振鶴ほか『方言與中国文化』人民出版社 1986:256）。しかし、この語源解釈はほとんど信用できない。なぜならば、ピジンという熟語は最初、広州とマカオで流行し始めたもので、上海ではない。上海に租界ができたのはかなり後のことである。可能性としては、「洋涇浜英語」は、イギリス人と彼らの広州通訳が 1842 年以降、上海に持ち込んだ「ピジンイングリッシュ」の民俗語源説である。

¹⁹ マレー語とヒンディー語出自の語は、一般に重量や貨幣の単位を指す。これらの語は最初ポルトガル人が使用し、後にイギリス人もマレー人やインド人と商売するときに使用した。例えば、*lac* (10 万) はヒンディー語の *lakh* からであって、1599 年に正式に英語として承認された（Webster's Ninth New Collegiate Dictionary, Merriam-Webster Inc., Springfield, Massachusetts 1988: 668）。*shroff*（銀行の職員、とくに金銭を管理する人を指す）は、ヒンディー語 *sarraf* とマレー語 *saraf* が語源で、1618 年正式に英語として承認された（Webster:1092）。*tael*（中国の重量単位“両”に相当する）は、マレー語の *tahil* が語源で、1588 年正式に英語として承認された〔Webster:1201; Hamus; Melayu, w ith Chinese and English Explanation 『馬中英辞典』、香港 1958: 349〕。

²⁰ ピジンの中にあるポルトガル語の単語が後に英語の単語に取って替わられた例として、*patili*（神父、ポルトガル語 *padre*）は、*gos-pigin moen* に、その中で、*pigin* は *business* を表し、*moen* は *men* を指す。すなわち「神の仕事を取り扱う人」である。*grandi*（大）は、*big* または *larg(i)* に変わる。*Pikinini*（小）は *smol* に変わる（Hall Robert A. Jr., *Chinese Pidgin English Grammar and Texts*, in *Journal of American Oriental Society*, 64, 3, 95-113, July-Sept. 1944: 95, note 2; Hunter 前掲書: 61-62）。

ポルトガル語のピジンはマカオにだけ残っていた。一方、ピジンイングリッシュは、外国との貿易に伴い、広州に続いて、中国のその他の地域でも徐々に広まっていった²¹。単語の発音は、現地方言の音韻体系に基づいていた。例えば、摩擦音が閉塞音に変化している。f > p, v > b, r > l などである²²。

ピジンの構文法は基本的に中国語をモデルにしている。たいへん簡潔なため、買い手と売り手や主人と使用人の関係に適していたようであった。外国人がピジンを“構文法の欠如した、論理性のない、最も簡単な成分に省略した”言語と見なした理由は、このことから説明できる²³。

ピジンは、通事を使用した言葉であった。彼らは、中国人と外国人との公務上の連絡事項を伝達するために、戸部によって雇われた中国人スタッフである²⁴。中国人と外国人との個人的な接触を防ぐために、外国人は中国語を学ぶことが許されなかった。

このような状況は、19世紀初頭、プロテスタント（新教）の宣教師が中国に上陸してから、大きな変化が生じた。1803年ごろ、ロンドン伝道会の宣教師、ロバート・モリソンは中国行きの東インド会社の船に乗ることを試みたが失敗した²⁵。彼は苦勞の末、ついにアメリカ船に乗り込み、1807年9月7日広州に到着した。布教活動は依然として禁止されていたが、モリソンはひそかに中国語の研究を始めた²⁶。1809年2月20日、彼は東インド会社の広州事務所に通訳者として迎えられた²⁷。モリソンが商業活動のためよりはむしろ布教の

²¹ 「中国洋浜英語」（マレイ洋浜英語と区別するため、このように呼ぶ）の歴史は、4段階に分けることができる。広州及びアモイで発生した時期（1715-1748）、広州の「古典語」の時期（1748-1842）、香港、そして南京条約の後に開港した都市、及び長江流域で使用された全盛期（約1842-1890）、1890年以後の衰退期（Hall 前掲論文:95。Hallの分類は、J.E. Reinecke *Marginal Languages*, 772-785, Yale University Dissertations 1937 に拠ると言うが、残念なことに、私は未見である）。なお、ポルトガル語の痕跡が今でもマカオの中国語の中で見つかる。胡培周「葡萄牙語対澳門話的影響」、『方言』1991,4,241-242を参照。

²² Hall 前掲論文: 96。

²³ Hunter 前掲書: 61。

²⁴ *Hoppo* は、中国語の“戸部”に由来すると信じている人がいる。*Hoppo* は、西洋人が「粵海関監督」を指す語であって、同監督は戸部大臣によって任命された。但し *Hoppo* の語源について、異なる見方が存在している。Fairbank 前掲書:49, note 15 を参照。

²⁵ Thom Robert 前掲書: Preface, f. lv。

²⁶ Hunter は自著の中で、モリソンの最初の中国語教師が首をはねられた後、彼は中国語の勉強を深夜でせざるを得なかった様子を述べている。（Hunter 前掲書:60-61）。1833年10月26日広州に到着したプロテスタントの宣教師 Samuel Wells Williams は、回想録の中で次のように述べている。「明らかのように、長期間にわたり、広州当局は外国人の中国語学習を極力阻止し、また我々の学習に協力する中国人も脅迫された」（Williams Samuel Wells, “Recollections of China prior to 1840”, Delivered before the Society on the 13th January, 1873. In *Journal of the North-China Branch of the Royal Asiatic Society*, Shanghai, New Series, VIII, 1874: 17）。

²⁷ 参照 Wylie Alexander, *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese: Giving a List of their Publications, and Obituary Notices of the Deceased, with Copious Indexes*, American Presbyterian Mission Press, Shanghai 1867:3; 『近代来華外国人名辞典』中国社会科学出版社 1981:341。James Flint は東インド会社が雇用した最初のイギリス人通訳であった。彼は、1736年広州に到着、1746年東イ

ために中国語を研究したことは、彼が役に立つ中国語の学習書を作った最初の人物であったという事実からも明らかである²⁸。

1815年、モリソンはマラッカに転居し、ウイリアム・ミルンと梁阿発の協力を得て、1818年にそこに「英華書院」を設立した。梁阿発は恐らく中国最初のプロテスタント信者であろう²⁹。1825年、この学校は東洋一の中国語学校と見なされていた³⁰。マラッカでモリソンはさらに「察世俗毎月統紀伝」(*Chinese Monthly Magazine*)を出版した。これは中国語で出版した初めての雑誌である³¹。1823年、ロンドン王立アジア学会の経済的な援助の下、モリソンは聖書の中国語訳を出版した。これは聖書の最も早い中国語訳の1つである³²。

ンド会社から「要務総通訳」に任命された(Frèches, José, *La Sinologie*, Presses Universitaires de France, Paris 1975: 31)。しかしながら、多くのモリソンの後任者と同様、Flintは中国語をマスターするやいなや、中国語の研究を中止し、貿易業に専念した。

²⁸ モリソンにまた次の著書がある: *A Grammar of the Chinese Language* (Serpore, 1815) (Cordier Henri, *Bibliotheca Sinica. Dictionnaire Bibliographique des ouvrages relatifs a l'Empire Chinois*, E. Guilmoto, Paris 1904-1908. pp.1661-62、以下 Cordier; Lust John, *Western Books on China published up to 1850, in the Library of the School of Oriental and African Studies, University of London. A Descriptive Catalogue*, Bamboo Publishing Ltd., London 1987: 1023、以下 Lust); *Dialogues and Detached Sentences in the Chinese Language; with a free and verbal traslation in English. Collected from various sources. Designed as an initiatory work for the use of Students of Chinese.* (Macao, 1816)(Cordier: 1641-1642; Lust: 1022), *A Grammar of the English Language: for the use of the Anglo-Chinese College* (Macao, 1823) (Cordier: 1662, Lust: 1024)。1815年、モリソンはマカオで第1冊の漢英辞典を出版(参照 Morrison, Dictionary)。モリソンの辞典は、最初の対訳中国語・外国語辞典の1つである。1813年、フランスで *Dictionnaire chinois, français et latin, publié d'après l'ordre de S.M. l'empereur et roi Napoléon Le Grand., par M.de Guignes, résident de France à la Chine, attaché au ministère des relations extérieures, correspondant de la première et troisième classe de l'Institut* が出版された。この辞典は延べ13,316字の漢字が収められており、モリソン辞書の主要参考書の1つになっていた(Morrison, Dictionary: Advertisement, IX-X)。実際、これは Gernona 人、フランシスコ会修道士 Basilio Brollo (1648-1704)の字典草稿の印刷本であった。しかし de Guignes は、この辞典は自分が書いたものだと主張した(Bertuccioli Giuliano, "Biografia di Basilio Brollo", in *Dizionario Biografico degli Italiani*, XV, Roma 1972:4 参照)。

²⁹ 梁阿発は1789年広州に生まれる。1816年11月3日、ミルンがマラッカで彼に洗礼を施した。梁阿発の生涯について、Wylie 前掲書:21-22を参照。

³⁰ Hunter の前掲書:15。

³¹ この雑誌は1815年8月5日に出版され、1822年に廃刊した。最初の3年間は500部発行されたが、1819年に1000部以上に増加した(*Chinese Repository*, II, n.5, September 1833, 234-236, *Chinese Monthly Magazine* 参照)。

³² 『神天聖書』は、全21巻、1823年マラッカで出版。本書の翻訳はモリソンによって始められ、後にミルンの協力を得て最終的に完成した。本書は聖書の最初の中国語訳ではなかった。1822年、英国の宣教師 Joshua Marshman がすでにインドの教区で「聖經」という書名で聖書の中国語訳を出版していた。しかし、この訳本は恐らく中国には伝わらなかった。以後の十数年で、少なくとも2冊の聖書の翻訳が現れた。1835年に出版された『新約聖書』と1838年に出版された『旧約聖書』である。この2冊は W. H. Medhurst, E. C. Bridgman, J. R. Morrison, K. F. A. Gützlaff の共同作業によるものである。第4冊目は、最も優れた訳と言われる「委員会バージョン」で、1853年上海で出版された『新約聖書』と、1854年に出版された『聖書』である。プロテスタント宣教師のグループが翻訳したものである(Wylie 前掲書:1-6; Boardman Power Eugene, *Christian Influence upon the Ideology of the Taiping Rebellion, 1851-1864*, University of Wisconsin Press, Madison 1952: 47-48, 142-144を参照)。聖書の中国語訳と中国での流布について、§1.3と§1.4、及び Wylie 前掲書:3-6、『近代来華外国人名辞典』p.341、曾虛白『中国新聞史』pp.125-128、戈公振『中国報学史』pp.64-65

他のイギリス人宣教師もモリソンの足跡をたどってやって来たが、ただ、我々の知る限りでは、アヘン戦争（1839-1840）以前は、広州にいる西洋人の中でピジン英語ではなく、中国語を用いて、支障なくコミュニケーションできる人は極めて少なかった³³。1840年、1人の西洋人がこう書いている：「世界中からかき集めても、中国人、中国の歴史または中国の言語に対して少々でも興味を持っているイギリス人は1ダースにもならないだろう」³⁴。

西洋人と中国人の取引のほとんどは中国人の通事を通じて行わなければならなかった。しかし各地で数多くの異なる方言が話されているため、たとえ彼らでもしばしば意を伝えることができなかった。南京条約締結後、イギリスは中国の5つの港に事務所を開設した。1843年11月2日、イギリスの領事ヘンリー・グリブル（記里布）は、広州から2人の通訳をつれて廈門へ行ったが、彼はこの2人の通訳は福建語も、官話も分からないのに気づき、また別の通訳をさらに2人雇わざるを得なかった。1人は現地の方言が話せ、シンガポールに滞在したことがあり多少英語も分かるもの、もう1人は方言を官話に翻訳するものである³⁵。

19世紀前半の西洋人と中国人の接触は、明らかに間接的で、制限のあるものだった。しかも、最初は下層の民衆との接触で、彼らは現地の方言を使用し、官話を話せなかった。それゆえ、中国語の中の西洋言語の影響の跡に関しては、もし初期のものなら、我々はそれを方言の中から探さなければならず、官僚が使用していた官話の中から探すことはできないのである。

を参照。

³³ Hunter は 1882 年に次のように書いている。「私が 1825 年に中国に着いた後の何年間で、中国のことに明るい外国人はたった 3 人しかいなかった。1 人はモリソン博士、もう 1 人は今のデービス卿（任を解かれたばかりのイギリス東インド会社本部の総督）、そしてアメリカ人の私であった。当時、外国人の広州での活動に伴い、ピジン英語が流行し始めたころであった」（Hunter 前掲書:60）。1833 年広州に渡来したプロテスタント宣教師 Williams は、当時の状況を次のように述懐している。「今思い出してみると、1840 年以前は注意すべき点が 1 つあった、それは外国人の中国語学習者がとても少なかったということである。実際、林則徐が勅使であった時に、私はたった 5 人しか思い出せない。もしマカオのポルトガル人を除けば漢字を知っている人はごく僅かであった。この 5 人のうち 1 人はロバート・トム、もう 1 人はジョン・ロバート・モリソン、3 人目は Gützlaff である。この 3 人だけがイギリス政府の通訳有資格者であった」（Williams 前掲書:16-17）。Chang Hsin-pao は「Napier（1834 年）の後の動乱の 10 年間、イギリスは商業、外交、軍事部門で、中国語の通訳を 4 名しか雇っていなかった」と書いている（Chang Hsin-pao, *Commissioner Lin and Opium War*, Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1964:11）。この 4 人の通訳は、モリソンの他、モリソンの子息ジョン・ロバート・モリソン、ロバート・トム、ウィリアムスとギュツラフであった。しかし、ハンターは悲観的すぎたようだ。彼は通訳に当たった数人をあげただけで、モリソンと一緒に中国語を研究していたその他のプロテスタント宣教師を数えなかった。イタリア人の Giuseppe Maria Calleri はずっとマカオで中国語を研究していたし、マカオは 1834 年から大きな外国人コミュニティがそんざいしていた（Bertuccioli Giuliano, *Giuseppe Maria Calleri: Un Piemontese al servizio della Francia in Cina*, Pubblicazioni di Indologia Taurinensia, Torino 1986）。

³⁴ Thom Robert 前掲書: Preface f.2r.

³⁵ 廈門イギリス領事館の Gribble の 17 通目の手紙（1844 年 2 月 12 日）に見える。この手紙は Fairbank 前掲書:165, note 20 からの引用。

最初に、「外国人」(夷人)と直接接触したのは広州の人であった。西洋人は中国のその他の港に行く時、広州出身の助手、特に広州出身の通訳を連れていった。なぜなら彼らはピジン英語が出来るからである。中国における外国の勢力の拡張に伴い、広州人もその他の外国人居住地に流れ込んでいった³⁶。

数十年を経て、多くの英語の単語がピジン英語を通じて、広東各地の方言に入ってきた。これらの語が表しているは、以前の中国では知られていない事物だった。例えば、sandwich は、広州方言では「三文治 *sammenji*」のように発音する。(trade) mark は、広州語では「麥 *mak*」のように発音する。bus は 広州語では「巴士 *baxi*」のように発音する。Stamp は広州語では「土擔 *xidam*」で、strawberry は、広州語では「士多啤梨 *xidobelei*」、toast は、広州語では「多士 *doxi*」、cheese は、広州語では「之士 *jixi*」と発音する³⁷。

これらの語は、後に他の方言や官話の中にまで入り込んだ。例えば広州語の中の「巴士」「之士」「三文治」は相次いで上海方言と官話に取り入れられた。但し一部の語は最初の表記がそのまま保たれているが、一部の語は、古い表記が使われなくなり、1 つないし幾つかの新しい表記が生じた。また一部の語は、古い表記と新しい表記の両方が併用されている³⁸。

ピジン英語が口頭言語であるために、いくつかの南方方言においては、外国の単語が通常音訳語の形で借用される³⁹。しかしながら、官話、そして一般的に書面語では、音訳以外の形の借用語が好まれる。

広州方言はより音訳語の影響を受けやすいように見受けられる。しかしこれは、広州方言が真っ先に外国語と接触したためであって、ある特定な方言の性質・構造に由来する言語学上の動機付けによるものではない。したがって一般的に、南方の沿海地方の方言にはピジン英語による影響があったと考えるべきである。そして専ら話し言葉としてのピジン英語は 1 つの言語として徐々に一般化していったが、その語彙は主に他の言語からの音訳語によって構成されていた。現地人は、喜んでこれらピジン英語の語彙や表現を自分たちの方言に取り込み、新しい事物を指し示したのであった。

³⁶ Fairbank 前掲書: 164-166 頁。

³⁷ これらの語、及びその他の英単語(主に音訳語)がいつ広東方言に入ったのかを正確に言うのは無理難題であろう。広東語の中で現在使用されている英語からの語が少なくとも 200 語ある。その大部分は音訳語か混種語である。そして、そのほぼ 3 分の 1 が「普通話」に取り入れられている(饒秉才ほか前掲書 320 頁、陳原『語言与社会』71 頁、周振鶴『方言』236-237 頁を参照)。

³⁸ 「巴士」(*baxi*)は最初の表記を残しているが、官話では *bashi* と読む。「之士」(*jixi*、即ち *cheese*)、これはピジン英語の *ciz* から来ている。Hall 前掲書:107 参照)も官話に取り入れられたが、広州語の *ji* (之)と *xi* (士)は、官話では *zhi* (之)、*shi* (士)と発音される。官話の中には別の 2 字で、英語の *cheese* と音が似ているものがある。それは計司 (*jisi*) である。「三文治」(*sammenji*) は元々の表記を止めているが、官話では *sanwenzhi* と読み、のちにまた新しい表記: 三明治 (*sanmingzhi*) が追加された(参考 Chan-Kwok 前掲書、饒秉才ほか前掲書を参照)。

³⁹ 広州方言以外に、福建方言(閩南)の中にも例えばマレー語に由来した音訳語が少しある。周振鶴前掲書 237-238 頁、Santa Maria, China and Malay-Indonesian World を参照。

19 世紀、中国に渡来する西洋人の著しい増加により、沿海地方は、“大陸的”の中国の周辺に位置しながら、経済、商業、及び語彙の面において、かつてないほど重要な地位を獲得したのである。

訳注：

(1) 何群雄著『中国文法学史事始』（三元社 2000）を参照。

(2) 何群雄前掲書 p.37-38 は、4 名とある。リッパが言及した 2 人の漢字名は、谷文耀、殷若望である。

Francisco Varo's Grammar of the Mandarin Language (1703) *

前書きと謝辞

今我々が Francisco Varo の *Arte de la Lengua Mandarina* を翻訳したのは、我々各自が初期近代中国語とスペイン語に対して興味があり、お互いに 16 世紀から 17 世紀に中国と関わりをもったヨーロッパ人宣教師のテキストに関わってきた結果である。これら全ての分野に貢献する可能性があるため、この資料は翻訳し普及させる価値があると思われる。この努力の中我々は Sandra Breitenbach 博士（カルガリー、Alberta）という、Francisco Varo の生涯と著書の専門家からの協力という恩恵を受けた。イントロダクションで、彼女は我々2人のどちらもなしえない方法で *Arte* と著者を歴史的で知的なコンテキストに位置づけた。

この仕事の完成は、様々な機関と個人の助けなしではありえなかった。我々はまず初めに、我々に *Arte* のコピーをファクシミリで複写することを許可してくれた、ローマの Biblioteca Dell'Accademia Nazionale dei Lincei e Corsiniana に心から感謝の意を表明したい。そして我々はまた更に我々とこの図書館との連絡係を務めてくれた Breitenbach 博士にお礼の言葉を述べる。我々はまた Laurent Sagart 博士（パリ）の助けにより、Bibliothèque Nationale de France の所有する別のテキストのコピーを利用する事ができた。翻訳テキストの漢字索引の編集はアイオワ大学の Center of Asian と Pacific Studies の承諾により可能となった。そのサポートに我々は深く感謝する。最後に、*Studies in the History of the Language Sciences* の編集長である、E.F.K.Koerner 教授には、本書の出版の長い準備過程の間たゆまぬ援助を下さり、ここに謹んで感謝の意を述べたい。

W.South Coblin & Joseph A.Levi

アイオワ市、アイオワ州、1999年7月

編集者の序文

1. テキストの背景

正式な記述文法は近代中国語学の伝統の一部ではなかった。等韻学と呼ばれる、伝統的音韻体系の発達における初期動機要因と考えられてきた、インド仏教との文化的、宗教的接

触ですら、中国人に彼ら自身の言語のいかなる文法書も書かせなかった。そのような文法記述は、中国に進出したヨーロッパ人カトリック宣教師とともにのみ現れ、それは 16 世紀に始まった。最初に到着した聖職者はイエズス会であったが、まもなく他の修道会の会員達もそれにつづいた。彼らはラテン語文法の教養があり、また彼らの母語、その多くはロマンス語の新しい文法的伝統にも精通していた。このラテン語とロマンス語の骨組みが彼らがまもなく書き始める事になる中国語の文法に雛形を与えた。宣教師たちは彼らの初期の活動中に出会った中国南部地方の方言、とりわけ福建省の方言に幾分専心していたが、彼らがより興味を持って学び記述したのは中国の官僚階級や官吏が使用する言語であった。この「官僚の言語」は中国語では「官話」と呼ばれ、宣教師はそれを「マンダリン」と呼んだ。

この官話の最も早い文法書として知られるのは、ドミニコ会宣教師、Juan Cobo (d.1592/93) によって書かれたものである。これはドミニコ会の記録では *Arte de la Lengua China* (中国語文法) (Gonzales 1964-1966 V, p.42) と呼ばれ、スペイン語の *arte*、直訳すれば「技術」は、文法的技術を意味する。この他にこの人物の著書とされる、よく似ているが異なるタイトルのものが二つある。すなわち、*Arte de las letras Chinas* と *Lingua Sinica ad certam revocata methodam* で、このうちどちらかは実際は *Arte de la Lengua* と同じかもしれない。その次の官話文法書としては、その書名は記録されていないが、別のドミニコ会宣教師、Francisco Diaz (1606-1646) によって、1640 年か 41 年にフィリピンで書かれたものがある (Gonzales,p.42)。3 番目には著名なドミニコ会布教団、Juan Bautista de Morales (1597-1664) によるものがある。さらに別の書として、*Arte de la Lengua Mandarina* (官話文法) という、誰かは分からないが Juan Bautista de Jesus の一人によるものがあるが、実際には Morales の文法書であろう (Gonzales,p.15)。

この「ドミニコ会文法書」系列の次の著書である、これもまた *Arte de la Lengua Mandarina* と呼ばれるものは、1682 年に Francisco Varo によって完成された。先達と同じく、著者の生きている間それは稿本として流布したが、16 年後の 1703 年、フランシスコ会修道士、Pedro de la Pinuela によって、別のフランシスコ会修道士、Basilio de Glemona の *confesionario* (すなわち告解本) と共に、広東で出版された。この本はいかなる形態の中国語文法書の中でも最も早く出版されたものであると考えられる。従って中国言語学の歴史にしめる位置、及び 17 世紀の官話に音韻、シンタックス、語彙面で具体的な資料を供給するという 2 つの理由から、大変興味深く重要なものである。これらの理由から今翻訳に取りかかったのである。

2. 伝記資料

Varo の文法書の歴史的背景を考えるにあたって、我々は著者と貢献者の生涯を手短に要約する事から始めたい。

2.1 Varo の生涯と著書についてはイントロダクションで詳細に取り扱われている。目立った資料は以下のように要約できる。Francisco Varo はアンダルシアの人で、1627年10月4日にセビリヤで生まれた。彼のドミニコ会信者としての活動は1643年10月7日に出身地にあった Convent de San Pablo で始まり、一年後告解を行った。それから彼は Holy Rosary Province に入会。1646年6月に先に簡単に触れた有名な布教団 Juan Bautista de Morales に参加、ドミニコ会極東布教団の根気の良い新会員となった。このグループは Veracruz に赴き、Varo はメキシコ滞在中司祭に任命された。1648年4月アカプルコから離れ、6月にマニラに到着。Varo はそこで一年間官話を学んだ。1649年7月、彼は Pasig を離れる Morales のより小さなグループに参加した。彼らは8月3日に福建省安海から3マイル南の地点に到着した。そこから Varo は他の修道士とともに福安に移り、そこで彼の中国での伝道活動が正式に始まった。

その生涯で、Varo は一方ではイエズス会との有名な「論争の儀式」での精力的かつ活発な役割が知られ、もう一方では生涯を通して熱心に中国語を学習したことで知られている。彼の官話へのすばらしい精通ぶりは布教団では伝説的であった。彼の発音の技術は初期の資料に明白に述べられており、また彼は公的な会見の場や法廷で官僚によって用いられる、分かり難く大変公式な談話形態に熟達している数少ない伝道師の一人として評判であった。Varo はまた活発で精力的な中国語の教師でもあり、文法書に加えて彼はまたポルトガル語—官話、スペイン語—官話の用語集を書いたことが知られている。Varo は二つの中国名を持っていた。その1つの、萬方濟各は彼のスペイン名を音訳しようと試みたものである。もう1つの、萬濟国は中国風に翻訳したものである。

Varo は彼の38年間の活動のほとんどを福建省北部の布教団で過ごした。しかしながら、1660年代後期の迫害の中彼は刑務所に入れられ、最後には多くの他の様々な修道会の伝道者とともに、広東へ追放された。広東での抑留の間彼は執筆者と教員としての活動をつづけた。1672年福建に戻り、1674年からは福州に落ち着き、そこが彼の永遠の活動基点となった。彼は1682年2月18日にそこで彼の *Arte de la Lengua Mandarina* を完成させた。それは稿本として広く伝わったが1687年1月31日に亡くなる日まで出版される事はなかった。

2.2 Pedro de la Pinuela は1650年メキシコ市で、スペイン人の父とスペイン系メキシコ人の母との間に生まれた (Rosso 1948; van den Wyngaert 1942)。彼はフランシスコ修道会で宗教活動を始め、神学に従事し、メキシコのサンディエゴ地区で助祭として仕えていたが、スペインから極東へ向かう布教団を率先していたフランシスコ会の Buenaventura Ibanez によって新たにそのメンバーに加わられた。このグループは1671年3月19日アカプルコからフィリピンへと出発した。次の年 Ibanez の一行は引き続きマカオに向かい、その間 Pinuela と他の修道士はマニラに残り、聖職授任式を待った。

1676年6月4日 Pinuela と他数名は中国への航海につき、20日福建省廈門に到着した。そこから彼らは泉州に向かい、Pinuela は引き続き予定されていた目的地である寧徳へと向かった。彼がそこに到着するとすぐに満州進軍がこの地に達し彼は山に避難することを強いられた。彼は多くの地に滞在したが、そのうちの一つ穆洋で、Francisco Varo と出会い中国語を学んだ (van den Wyngaert 1942:254,265,266)。

状況が落ち着いて以降、Pinuela は寧徳に戻り、そこが福建省北部の様々な地域での彼の布教活動の基点となった。1685年から1686年には彼は Bishop Bernardino Della Chiesa に同行し中国南部の様々な地域を巡察し、広東で旅は終わったが、そこから彼は潮州へと向かった。そこでの1年後彼は新たな布教活動を始めるため江西省に移動した。彼の江西省滞在は8年続いたが、健康上の問題から病後療養するため広東への旅により中断された。1694年彼は福建に戻りその後1699年フランシスコ会中国布教団の地方分区司教の地位に選出された。1702年彼は南京に移動したがまもなく病気になり広東で療養せざるをえなかった。そこにいる間、1703年に、彼は師である Varo の文法書の稿本を再び整理し、それに Basilio de Glemona による confessionarium を付け加えた。そして同僚の Er.Placyd Walczak、別名を Placidus de Valcio によってシロが書かれた (Rosso 1948:269)。

病気の回復により、Pinuela は廈門に移り、漳州に伝道区を設立するつもりであった。しかし彼の体調は再び衰え、1704年7月30日54歳で漳州で亡くなった。Varo の Arte を編集した他、Pinuela はまた多くの中国語の本と小冊子を書いた。彼の中国名には石鐸璋という、スペイン語の Pedro を一部は意識、一部は音訳したものと、石振鐸の2つがあった。

2.3 Basilio Brollo de Glemona (または de Gemona, di Glemona, a Glemona, de Cremona) は1648年3月25日にイタリアの Gemona で生まれた。彼は22歳のとき Reformed Venetian Province のフランシスコ修道会に参加し後に哲学と神学のレクターとなった。彼は1684年に極東布教団に加入し Bishop Bernardino Della Chiesa の随行員として中国に渡った。1696年彼は陝西省での教皇代理としての地位とともに、最初の中国教皇代理に選出された。しかし、この知らせを伝える大勅書は1700年まで中国に届かなかった。彼は1704年7月16日に陝西省で亡くなった。

De Glemona は西洋の言語と同じように中国語を用いて多くの書を著した。彼の中国名は葉宗賢であった。彼は38000文字という画期的語彙数の中国—ラテン語辞書の著者である。この Dictionarium Sinico-Latinum は稿本として流布した。このテキストは1813年にパリで Chretien Louis Joseph de Guignes (1759-1845) によって Dictionnaire chinois, francais, et latin, という題名のもと、de Glemona について何ら触れることなく、書き改めて出版された。この事は19世紀の中国学界で有名な剽窃事件となった。

3. Arte de la Mandarina のテキストの歴史と版本

1682 年の完成と 1703 年の正式な出版の間に、Varo の Arte は稿本としてかなり広く流布したと考えられる (Posso 1948:269)。Pinuela の 1703 年版の製作における編集者としての役割は広範囲に渡るようだ。これらの問題に関する詳細な討論は、イントロダクションにある。

Arte の 1703 年版としてストラックされたコピーの正確な数は知られていない。Henri Cordier (データ: 1849-1925; 1887; 1904-1922: vol. 3, cols. 1655-1657) は彼の時代に現存していた少なくとも 7 つのコピーを知っており、その内の 5 つは主要なヨーロッパの図書館に所蔵されていた。彼はまた個人の所蔵する 2 つの稿本コピーについても述べている。印刷されたテキストは彼の説明によれば一枚の紙で始まり、その右はタイトルページである。この後には 3 枚のフォリオページによるプロローグが続き、各ページの右下にはそれぞれ 1 つ、2 つ、3 つの星印が付いている。続いてテキスト本文は 50 枚のフォリオページからなり、そのほぼ 50 枚目の左ページまで印刷されている。これらは伝統的な中国のブロック印刷本の様式に基づいて、一から五十まで中国語の漢字で外側の縁にページ付けしてある。しかしテキストは西洋式のアラビア数字でも 1 から 99 までページ付けしてある。この本は 10 枚のフォリオページの Confessionarium で終わられている。こちらのフォリオページには右ページごとにアラビア数字で 1 から 10 までページ付けしてある。プロローグとテキスト本文はスペイン語である。Confessionarium はラテン語である。本の至る所に中国語の例文があるが、これらは全てローマ字化されており以下第 4 部で討論される。オリジナルテキストには、前述したフォリオページの欄外の数字以外に漢字はない。テキストは木版印刷で、手書きのオリジナルから離れている。

Arte の次の版は少なくとも二つ存在した。その一つは 1835 年に Naples でラテン語訳として出版されたものである。その題名は、Cordier (1904-1922: vol. 3, col. 165) の報告によれば、*Grammatica lingua Sinensis Auctoribus PP. Varo et De Cremona ex Hispanico in Latinum idioma translata et aucta* である。このコピーは Cordier の説明によれば中国の有名な徐家匯のイエズス会図書館にあると報告されている。

もう 1 つの版については Cordier は全く知らない。Rosso (1948:271) はこれについて以下のように述べている。

2 回目の版はオリジナルのブロックから離れて 1790 年に印刷された。この 2 回目の版についてのデータは 77 ページにある。この版では、Confessionario は削除され、ゆえにタイトルページには記載されていない。その場所には、編集者が 9 枚の新たなフォリオページを編集し印刷した。この非常に貴重な版のコピーはニューヨークの Hispanic Society of America Library に保管されている。

どこでそして誰によってこの版が作られたかは知られていないようだ。しかしこれと関連するものとして、我々はアメリカ国会図書館が所有する *Arte* の稿本について簡単に述べたい。このテキストはノートブックに書かれ、18 世紀後期の手によると思われる。これにはプロローグと *Confessionario* が欠けている。そのタイトルページでは、Rosso が *Hispanic Society Library* テキストで見て、彼の論文の p.270 に載せたファクシミリのタイトルページとの一致に満足している事が完全に同意されている。アメリカ国会図書館のマニュスクリプトの最初の左ページは不完全でオルタネイトなタイトルページのように、このように読める。*Grammar of the Chinese Mandarin Language /Composed by the p.../In Fokien in the year 1682 / which was / Reprinted in M...of the year 1793.*この稿本のテキストは3つの点で1703年版と相当離れており、12章で作者は1790年に書いたと述べている。

つまり、アメリカ国会図書館の稿本は *Hispanic Society Library* の1790年版（或いは、より確かには1793年）と密接な関わりがある可能性が高いようだ。実際、2つの明確な可能性がそれら自身により示唆されている。1つはアメリカ国会図書館のテキストは *Hispanic Library* テキストのハンドコピーである。もう1つはそれが本物の稿本であり、それをもとに後者のテキストは印刷された。さしあたって、最初の仮説がよりもっともらしく思われる。なぜならば、もし後者の編集者がただある個所を取り替えるつもりだけで1703年版の全てを再度コピーしたとは信じがたく、とりわけその場合、彼はオリジナルの1703年のプリンティングブロックを所有していたことになる。結局は、稿本と *Hispanic Library* テキストを実際に比較するしか最終的にこの問いを解決する事はできない。

4. テキストにおける文法上の骨組みと表記上の取り決め

プロローグから始まり、テキストには有名なスペインの文法学者である、Antonio de Nebrija (1444-1522) への言及が多くあり、彼の *Arte* に採用された文法分析の骨組みへの影響ははっきりと認められる。更に、特に13章では、「別の文法」や「古い文法」への言及があり、それはより初期のドミニコ会布教団によって編纂されたものである。これらが上述の1. で述べた幾つかの「ドミニコ会の文法書」についての言及である事はほぼ確実である。*Arte* とこれら初期の文法書及び文法的伝統との間の関係はイントロダクションで詳しく取り上げられている。

しかしながら、ここで Varo の中国語の発音表記体系について手短かに述べる必要がある。まず最初に、*Arte* で「官話」と表記される言語は実際には少なくとも16世紀から18世紀まで中国を支配していたと現在では一般的に考えられている南京語を基礎とした口語である。Varo の「官話」はゆえにいかなる時代の北京方言や「北京官話」も意味しない。口語に対する実験的な表記はマテオ・リッチ (1552-1610) と彼の仲間や弟子によって16世紀後期

に発達した。彼らのローマ字表記は数十年後のニコラス・トリゴート（1577-1628）の『西儒耳目資』で最も完成された形態に到達し、1626年に印刷された。Varoのローマ字表記の多くはトリゴートの体系を最小限に修正したもので、特にスペイン語を話す読者の要望に応じたものである。これに関する詳しい議論は、Coblin（1996,1997,1998）に見える。以下要約したものを記す。Varoの表記の後ろには、角括弧に予想される音価が記される。

語頭子音

最終音節

声調

清平 中或いは中上の高さで、長音記号と共に書かれる。

濁平 下降、曲折アクセントと共に書かれる。

上 中降、低アクセントと共に書かれる。

去 上中から上昇、鋭アクセントと共に書かれる。

入 中昇し急に或いは不意に止まる、短音記号と共に書かれる。

この表音体系はテキスト本文を通して首尾一貫して用いられる。しかしながら、プロローグではフランス人読者のために別のローマ字表記が紹介されている。このフランス式は、テキストの論議と例文からできる限り正確に決められたものであり、以下に示す。

語頭子音

最終音節

フランス式の声調記号は元のローマ字表記と一致する。

5. 翻訳の構造と協定

我々は Arte de la Lengua Mandarinina を翻訳する際、基本的に 1703 年版を用いた。具体的には、ローマの Biblioteca Dell'Accademia Nazionale dei Lincei e Corsiniana が所蔵するものである。Bibliothèque Nationale de France が所蔵する別のコピーもまた考慮に入れた。この 1703 年版と、年代を 1790 年から 1793 年と定められたアメリカ国会図書館の稿本テキストとの比較を行った。我々は 2 つの版は実質上 1 章、12 章そして 15 章の 3 カ所を除いて同じである事を発見した。稿本版のテキストのこれらの部分は付加物として個別に翻訳されたものである。序章、16 章、そして Confessionarium はアメリカ国会図書館の稿本にはない。

我々の英語の翻訳は 1703 年のオリジナルのページ区分に従って分かれており、それぞれの翻訳ページの反対側には対応する Lincei Accademia テキストのファクシミリページが置かれる。1790 年から 93 年の稿本版の翻訳にはファクシミリは与えられていない。これらの翻

訳は稿本のページ区分に従って分かれている。

印刷版テキストのプロローグは3つのフォリオから成り、それぞれ1つ、2つ、3つの星が記される。我々は翻訳では星の代わりにローマ数字を用いた。先に指摘したように、テキスト本文は西洋式にページ付けされておりフォリオはまた中国風に記される。我々は翻訳では西洋式のページ付けに従った。Confessionarium は西洋式にページ付けされたフォリオである。アメリカ国会図書館の稿本はページごとにページ付けしてある。

翻訳中の全ての脚注は新しいものである。オリジナルテキストには注はない。翻訳中の丸括弧はオリジナルから保たれたものである。角括弧は翻訳者の付加を示す。本自身のオリジナルテキストはスペイン語であり、多くのラテン語が加えられている。ある場合には、オリジナルのスペイン語が与えられ、翻訳が括弧内に加えられる。しばしば出現するラテン語の決まった要素、例えば「或いは」を意味する *vel* 等は、特に注意することなく翻訳された。その他の全てのラテン語の語形はイタリック体で記し括弧内に訳した。Confessionarium の西洋言語の部分はラテン語であり、それは英語に訳した。テキスト中の音訳された中国語の語形は、Varo のプラクティスでは語頭子音の後の音節の上のいかなる場所にも書かれたであろう区別的発音符を除いては、オリジナル通りに復元した。我々はそれらを以下のように様式化した。帯気音を表すアポストロフィは、語頭子音の直接後に置く。声調記号とライズドットは音節の主母音の上に書く。ドットは長音記号と短音記号の上と低、鋭、曲折アクセントの下に書く。オリジナルテキストには漢字は出現しない。我々の翻訳では確認できる箇所は漢字を挿入した。疑わしい箇所は、漢字の代わりに空欄記号を加えた。Confessionarium テキストの漢字を決定するのに、我々は古屋昭弘氏 (1991, 1992) によるこの資料の注意深い研究から大いに恩恵を受けた。漢字のピンイン索引は265ページ以下にある。

参考文献 (次号以降に挙げる)

* ヨーロッパ人宣教師による最初の中国語文法書は Francisco Varo (中国名を萬濟國) による *Arte de la Lengua Mandarina* (1703, Canton) であるが、それは当時の「官話」というものの性格や、ヨーロッパ人の見た中国語がいかなるものであったか、更には、中国語そのものの特徴を考える上でも非常に重要な文献と言えよう。本書はスペイン語(例文集の欧文部分はラテン語)で書かれたものであるが、この度、下記のような原書のファクシミリコピーに英訳が付されたものが出版されたのを機会に、その英訳に基づいて日本語訳を試みることにした。なお、Varo に関しては、これまで古屋昭弘氏の一連の先行研究がある。

W.South Colbin, Joseph A. Levi: *Francisco Varo's Grammar of the Mandarin Language (1703) An English translation of 'Arte de la lengua Mandarina'* (John Benjamins publishing company, Amsterdam / Philadelphia, 2000)